二十一、泊船寺の夜泣き芭蕉像

泊船寺（東大井四丁目五番二号）の境内には、多くの句碑があります。

　　はせをの前に芭蕉なく、芭蕉の後にはせをなし

など、いずれも芭蕉につながりのある句が彫られています。

　この寺は、今から約六百年前、室町時代の永徳二年（一三八二）に、龍江禅師が品川の漁師の網にかかった、阿弥陀如来の像を祀るお堂を建てて、開いた寺です。その後、江戸時代になって、この寺の住職だった千厳宗億禅師は、中国の学問を学んだり、詩歌を作り文人や俳人と親しく交わり、芭蕉とも親しかったそうです。境内にあった牛耕庵を、芭蕉はとても気にいり、度たび泊まったそうです。

　芭蕉は、元禄七年（一六九四）、故郷の伊賀の上野（現在の三重県上野市）に帰る途中で、病死しましたが、ほとんど同じ頃、牛耕庵の古池の横にあった、芭蕉がかわいがった柳の古木が枯れるという、不思議なことがありました。

　それから百年後の寛永五年（一七九三）の芭蕉翁の百回忌に、俳人石河積翠が、その古木で芭蕉像を彫刻し、寺に安置したと伝えられています。

　その後、文化年間（一八〇四～一七）には、俳諧師の山奴（のち出家して白牛禅師）が牛耕庵のあったこの地を中心に、俳句を広めました。

　芭蕉像ができてから、何年か後の話ですが、ある夜、この芭蕉の像が盗まれてしまいました。寺では、大さわぎになり、手をつくして探しましたが、見つかりません。早速代わりの木造を作って、安置しました。

　盗人は、小道具屋に売ったのですが、そこの主人は、その像が、有名な芭蕉像で、しかも、盗品であることも知らず、店に並べて置いたそうです。その日の真夜中のことです。

「おい！おい！」

と、人を起こす声がするので店の主人は目を開けましたが、周りには誰もいません。耳のせいかなと思い、また横になりました。ところが、また、しばらくすると、

「おい！おい！」

と、声がするので、今度は、表の戸も開けてみましたが、やはり誰もいません。おかしいなと思いながら、布団にもぐり込むと、また声がします。声のする方角は、どうやら、今日買ったばかりの木の像です。主人は、恐る恐る像に近づいてみて、あっと驚きました。

像の目に涙が浮かんでいます。

「わしは、早く寺へ帰りたい。」

と、かすかな声でいいます。

「泣くな！そのうち何とかするから・・・・・」

芭蕉像は、次の日の夜も、またその次の日の夜も、同じことを言っては泣いたそうです。

店の主人も、やっと、この木像が、泊船寺の芭蕉像で、しかも盗まれたものであることがわかり、悪いことをしてしまったことを悔やみ、その日の夜に、芭蕉像を丁寧に白布に包んで、泊船寺の門の所に置いてきたそうです。

　翌朝、寺の小僧さんが、門を開けようとすると、そこに白布で包まれたものが置いてあります。小僧さんが、包みを開けると、中から盗まれた芭蕉像が出てきたので、小僧さんは、大声を上げて住職に伝えました。

　そして、戻ってきた芭蕉像を、元の場所に安置したそうです。村人も、この話しを聞いて寺に集まり、芭蕉翁の供養をしました。

　この芭蕉像は、高さが三十八センチメートルで、芭蕉の弟子の服部嵐雪・宝井其角の木像と共に、品川区の文化財に指定されて、大切に保存されています。